○新帰化植物ヒメイラクサ（新称）（浅井康宏） Yasuhiro ASAI: On a new naturalized weed, *Urtica urens* L. in Japan

三重県の帰化植物研究家として活躍されている太田久次氏から，検定を依頼されているものの中に小形のイラクサ科の一品がある。一見してミズの仲間を思わせる外観を具えたイラクサを小さくしたようなものであるが，茎葉に顕著な刺毛を有し，皮膚などに触れると疼痛を与えること，我国のイラクサ属の諸種と全く同様である。

ところで昨年（1974），筆者は欧米を訪れた折，各地で直接本属の生品について観察の機会にめぐまれ，その際にこれがヨーロッパに広く分布し，また現在，北米合衆国の一部にも帰化している *Urtica urens* L. [Sp. Pl. 984 (1753)] であることに気付いた。

本種は英名を Annual Nettle ともいわれるように1年草で，草丈 10～50 cm 許であるが，生育条件のよい場合には，それ以上にもなる。茎は4稜形で直立し，また下部で分岐，叢生し，多数の刺毛をもつ。葉は卵円形，有柄で対生し，2～4 cm 内外で，葉縁に顕著な粗鋸歯を有する。初夏から秋にかけて葉腋から密に花をつけた短かい花序を出し，わずかに下垂する。

本種は筆者がヨーロッパ各地で観察したかぎりでは，多少とも湿り気のある平地の路傍や荒地，畑地などに生育しており，しかも寒冷な気候条件を好む傾向を有する。なお現在のところ本種は，三重県で見出されているにすぎないが，将来，我国の関東以北の低湿地に帰化する可能性があり，その具備する刺毛と相まって，好ましからぬ害草となる恐れがある。

また本種の和名としては，前述の草姿からイラクサミズとでもしたかったが，しかし欧米名の Kleine Brennessel や Lesser Stinging Nettle と全体が小さく可憐なことからヒメイラクサなる名を選んだ。 （東京歯科大学）

Summary A small European Stinging Nettle, *Urtica urens* L. was reported from Japan as an alien noxious weed. The plants were found at the first time from Kusu-chô, Mie Prefecture of Western Honshû on May 16, 1963.

○草木性譜と有毒草木図譜の著者名（久内清孝） Kiyotaka HISAUCHI: On the proper name of the author of the Sōmoku-seifu and Yūdoku-sōmoku-zufu (1827)

この2書は文政10年（1827）に名古屋と大阪とで上梓発売され，当時から明治の中程まで広く行はれたものであることは周知の事実で，著者は尾張藩の舎人清原重巨で，息子の重光が校訂している。さて問題は著者の名が重巨であるか，重臣であるかである。この人の名の上に舎人とあるが，舎人は役名とか職名とかであって，この本の序文をかいた菅原在経という人が文中に尾張藩清原重巨としている通り，これがこの著者の姓と名であって，舎人はタイトルのようなものである。それなのに松村先生の植